

面影 片山廣子

大正十一年（一九二二年）

——峰百合子という人——

佐佐木朋子

大塚楠緒子を回想した廣子のエッセイ「むかしの人」(「心の花」大正十一年七月号)に、次のような一節がある。

(楠緒子が) 橘さんや峰さんとハイカラさうなお話をしていらいつしやる時、私だけは遠くの方で日本人くさい顔をして坐つてゐたのであつた。楠緒さんは私のそんな気がよくお分りだつたと見えて、私だけの時には決して決してハイカラな話をなさらなかつた。私は断言する、ハイカラなのはあの方のおつむりだけで、心はやつぱり私と同じやうに古めかしいものであつたらうと私は今かたく信じてゐる。

文中の「橘さん」は橘糸重(一八七三—一九三九)。「心の花」の歌人で東京音楽学校のピアノの教師である。信綱とは同郷で一歳違い。家族ぐるみの付き合いがあり、兄妹のような感覚がある。楠緒子より歳上

だが糸重が楠緒子に寄せる友情は篤い。俗に「島崎藤村の恋人」と言われることがある。糸重本人はこのように言われることに迷惑していたが。

「峰さん」は峰百合子(一八七五—一九一九)。「心の花」の歌人。人間としての楠緒子にも、その作品にも傾倒していた。楠緒子が亡くなった直後、遺稿集をまとめようと尽力した。旧姓は樋口。

わたしが冒頭の一節で気になるのは二点ある。一つは楠緒子の「心」(精神の本質という意味である)が「私と同じやうに古めかしい」と自分に引きつけて書いている点。もう一点は「古めかしい私」と対立するような、ハイカラな「知識」を持っている人として糸重や百合子を挙げている点である。このほめかし自体がたいそうイヤミである。知識より心が大事だと思う人の方が多いに決まっているからだ。

この文章を書いた大正十一年、数えて四十五歳の廣子はどんな人として見られていたか。

大正四年にバーナード・ショーの戯曲『船長ブラスパオンドの改宗』を翻訳したのを皮切りに、アイルランド文学の翻訳に本格的にとり組み、その訳業は森鷗外や上田敏から高い評価を受けていた。大正五年には最初の歌集『翡翠』も出し、創作の面でも表現者としてひとり立ちしていた。

夫は大正九年に他界していたが、二人の子供達は順調に成長し、数えて二十三歳と十六歳となっていた。経済面の具体的な事情は不明ながら、夫の死後もことさら生活を送る才能ある輝かしい女性に見えただろう。

わたしは、この文章は、糸重と百合子に対するライバル意識が書かせたと考えてい